

海外学会報告

Professional Facial Reconstruction Workshop に参加して

口腔解剖学第一講座 宇都野 創

Professional Facial Reconstruction Workshop は、身元不明の白骨死体の頭蓋骨から生前の顔貌を推定する復顔法の技術習得のためのワークショップである。学問的には法人類学に属するこの復顔法は現在、描画による二次元的な方法、彫刻による三次元的な方法、そしてコンピュータに頭蓋骨の画像をとりこみ顔貌を作製する方法が存在する。筆者はおもに描画による二次元的な方法を持ちてきた。今回のワークショップは彫刻による三次元的な復顔法の技術を習得するというものであった。

本コースは英国マンチェスターのマンチェスター大学 Unit of Art in Medicine のユニットオーガナイザーである Dr Caroline Wilkinson 氏と現在ヨーロッパにおける三次元的復顔法の第一人者である Mr Richard Neave 氏のよびかけにより本年 2 月におこなわれた。9 割近くが EU 圏内および米国からの参加で、その他はメキシコから一名、日本から一名（筆者）であった。その参加者は FBI や各国の警察関係者、大学で法科学の講座に属している研究者で、歯科医師は筆者とベルギーから参加した Rudo 氏の二名であった。

ワークショップのプログラムは半分近くを顎顔面領域の解剖の学習に割り当てられており、マンチェスター大学の解剖実習室において、固定された標本の観察やスケッチそしてレクチャーがおこなわれた。この際に提示された標本は普段から御遺体や標本に接している筆者から見ても目を見張るものが多く、剖出のアプローチなどは学ぶべきことが多かった。基本的な解剖の講義に次いで縫合の閉鎖状態、歯の萌出状態といった歯科医学領域の知識も多く含まれた頭蓋骨の所見からの人種、年齢そして性別の



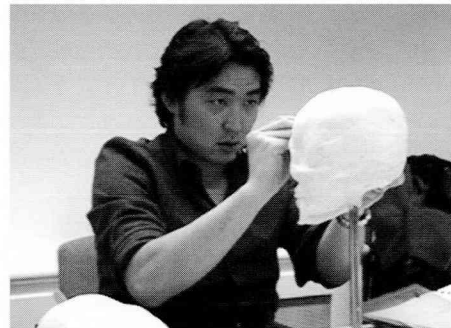
ワークショップ参加者およびスタッフ一同

推定のレクチャーがおこなわれた。これらのレクチャーの後、いよいよ実際に復顔をおこなうステージとなった。ここではまず、頭蓋骨をアルジネートと石膏にて印象を採得し、頭蓋骨の複製を作製する。これを FH 平面が床と平行になるように台に固定し、その複製頭蓋骨の nasion や gonion といった人類学的計測点に軟組織厚の基準値に従ったマーキングを施しこれに従いつつ、このレプリカの頭蓋骨上に粘土をもちいて筋、軟骨そして唾液腺などをつくり軟組織をつけながら顔貌をかたちにする。上述の方法で成人と小児の二体の復顔をおこなった。ワークショップ最終日には参加者全員がそれぞれプレゼンテーションをおこない研究や意見の交換をした。筆者は上顎骨と下顎骨の成長における骨の添加と吸収に関するプレゼンテーションをおこない、Best Presentation Prize を受けることができた。ワークショップ終了後はマンチェスター大学との共同研究についての話し合いをおこない、好感触を得ることができた。

今回、このワークショップに参加し、知り合った様々な参加者やレクチャーをおこなった解剖学や芸術家の先生方との交流を含めマンチェスターに滞在した日々の一分一秒が筆者にとって何物にも代え難い大変貴重な経験となり、今後の研究や教育においても大変有用なものとなったと確信する。



彫刻のレクチャーを受ける参加者



復顔作業に取り組む筆者